

ベトナムと日本の介護職員における職務意識の比較研究

－ 社会の特性と専門教育の検討 －

○ 東北福祉大学 後藤 美恵子 (7009)

キーワード：ベトナム社会、高齢者対策、専門教育

1. 研究目的

ベトナム社会主義共和国（以下、ベトナムと略す）は、1986年の第6回共産党全国大会でのドイモイ（Doi Moi：刷新）政策の採択以降、政治経済の改革に乗り出し、統制計画経済政策から市場経済への転換は経済的活況をもたらした。急速な「近代化」は、これまでの「伝統的」枠組みの意味は必然的に変容せざるを得なくなり、地域社会の生活に新たな経験を積み重ね、新たな意識・価値体系を生み出した。都市生活、農村生活の基礎的な社会集団である「家族」の家族機能や地域社会の生活構造にも大きな影響を与え、都市部では、都市化現象をもたらした核家族化が進展し、農村部では、経済成長が鈍化したことで、農村労働者の失業が増加し、農村部から都市部へ人口移動が起これ、都市問題をさらに悪化させ、家族意識の変容は、同時に高齢者の扶養問題がベトナム社会に顕在化した。ベトナムの人口動態の推移状況による推計では、2012年の高齢化率は8.21%で、10年前の2002年の7.90%と比較して伸び率は0.31倍であるが、10年後の2022年には12.12%と伸び率は3.91倍と高くなっており、今後、高齢化はますます進展し、高齢者の扶養問題が顕在化することが予測される（政府統計）。人口移動と経済発展は表裏一体の関係にあり、今後も人口移動は避けられない問題と言える。経済発展とともに高齢者扶養に対する家族の生活保障機能は弱体化していく過程の延長線上において、家族の生活保障機能を補填するための人材育成・養成が必要不可欠な課題であると言える。

ベトナムの社会背景を踏まえ、社会保障の構成要素として社会福祉の基盤を模索することを主旨とし、本研究では、ベトナム高齢者福祉施設での調査で用いた指標を我が国の介護職員に実施することによって、ベトナムと我が国の介護職員との職務意識の構造を比較し、ベトナム社会に即した専門職の人材育成・養成の方向性を示唆することを目的とした。

2. 研究の視点および方法

調査は我が国の高齢者福祉施設3ヶ所の介護職員210名を対象とした。本研究で用いた指標は、基本属性、仕事満足度（東條ら，1985）、介護肯定感（櫻井，1999）について回答を求め、ベトナム調査結果（後藤，2012）と比較した。

3. 倫理的配慮

調査は事前に対象者の趣旨と概要を説明し承認を得た上で無記名・任意回答で実施した。

4. 研究結果

対象者は男性36.9%、女性63.1%。平均年齢33.7±10.2歳。東條ら（1985）の次元別

仕事満足度の5次元の構成のうち1次元『「仕事内容」に対する仕事満足度』の7項目を単項目の尺度で測定し、各項目の得点を2群に分けた(平均値を基準)。櫻井(1999)が開発した肯定感評価尺度を一部改変して使用し、因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った結果、因子負荷0.4以上の12項目が選択され、3因子が抽出された(累積因子寄与率48.64%)。因子負荷量の高い項目を優先し、第I因子から順に「満足感」「生きがい感」「自己成長感」とした。3因子について、それぞれの項目の得点を合計し、項目数で除したものを各因子の得点とし、その高低で2群に分けた(平均値を基準)。仕事満足度の各項目の2群について、介護肯定感の各因子の肯定群と否定群に差があるか否かを χ^2 検定によって比較した。「満足感」では、やりがい($p<.001$)、満足感($p<.001$)、創意工夫($p<.01$)、有益($p<.01$)、楽しい($p<.001$)において有意差が認められた。ベトナムとの共通有意項目は、やりがい、創意工夫、魅力、楽しいであった。「生きがい感」では、やりがい($p<.01$)、満足感($p<.001$)、魅力($p<.001$)、楽しい($p<.001$)において有意差が認められ、「自己成長感」では、やりがい($p<.001$)、満足感($p<.01$)、魅力($p<.01$)において有意差が認められた。ベトナムとの共通有意項目は認められなかった。

5. 考察

介護肯定感は全体として中立的であったが、満足感、自己成長感は中立点よりわずかに肯定的な方向に偏り、生きがい感は中立点よりわずかに否定的な方向に偏っていた。利用者との関係や介護役割に対する介護肯定感としての満足感、仕事満足度の4つの要素において意識が高いほど有意な関連が認められ、分散結果から満足感の高さは比例関係であり、仕事満足度の高さが介護肯定感に影響を及ぼしていることが明きあらかになった。一方で、有益な仕事、楽しいにおいて有意な関連が認められたが、分散結果では満足度の低さと比例関係であり、不満足感の利用者との関係や介護に対する満足感に直結して肯定的な感情に寄与しないことが明らかになり、ベトナムとは乖離した結果であった。やりがい、満足感、創意工夫が生かせる、魅力的な仕事との比例関係から概観すると、専門職として介護に求められる質と現実の差の自己評価として、介護の目標を志向する結果であると肯定的な評価として捉えられる。ベトナムでは、介護の概念がなく専門職として確立していないため、専門職として志向する基準がないことが両国の差だと言える。仕事に対して仕事満足度が高いほど、仕事に対して自分自身の人生に対する意味と価値を見出していることは、利用者の人生を支配する介護に対する意味と価値の表出であると推考される。また、仕事満足度の意識が高さと自己成長感の有意な関連は、対人援助サービスとしての介護の本質である魅力は自己成長感に寄与し、介護の本質をもたらしていると推考される。

職務意識は介護肯定感によって影響を受けていることを踏まえ、ベトナム社会における「敬老思想」を機軸とし、伝統と近代との融合の観点から専門職の人材育成・養成としての専門教育の検討が必然的な課題であることが示唆された。

[本研究は平成24～26年度科学研究費(基盤研究(C))補助金による研究の一部である。]